



田中館愛橘 (1856-1952)



写真：文化勲章受章時(昭和19年4月29日)題字：氏名サインとも田中館愛橘自署より

田中館愛橘会 会報 56号

(たなかだてあいきつ)岩手県二戸市出身の物理学者。日本の理科系諸学の基礎を築く。文化勲章。文化人切手。東大教授。貴族院議員。地球物理学の研究、度量衡法の確立、光学・電磁気学の単位の研究、航空学・気象学の普及などに功績。日本式ローマ字論者。

第 33 回 田中館愛橘会総会・講演会

日時：平成30年5月21日(月) 会場：シビックセンター

今年度の総会は博士の命日である 5 月 21 日に開催され、関連行事等下記のように執り行われました。

- 1 二戸市教育委員会へマンガ「日本物理学の父田中館愛橘」の贈呈
二戸市 鳩岡教育長に御出席をいただき、二戸市内新小学4年生分として
- 2 第33回 田中館愛橘会総会を開催
- 3 献歌 金田一歌の集いのみなさん
①めでたや 万(よろず)の国 ②言霊(ことだま)のいや栄えゆく
③合唱ソレアード 子供たちが生まれた時
- 4 講演会 講師：一般社団法人新渡戸寄金 理事長 藤井 茂 氏
演題：「田中館愛橘と新渡戸稲造」



◇平成29年度 決算書 平成29年4月1日～30年3月31日

収入の部

科目	本年度決算額	摘要
繰越金	269,612	
会費	456,000	
雑収入	50,000	
合計	775,612	

支出の部

科目	本年度決算額	摘要
総会費/会議費	127,489	
顕彰活動費	50,000	科学研究発表会
会報印刷費	108,000	会報
事務消耗費	17,138	
通信費/雑費	125,335	
事務局費	40,000	
謝礼費	100,000	中村氏データ謝礼
什器備品費	114,804	パソコン一式
繰越金	92,846	
合計	775,612	

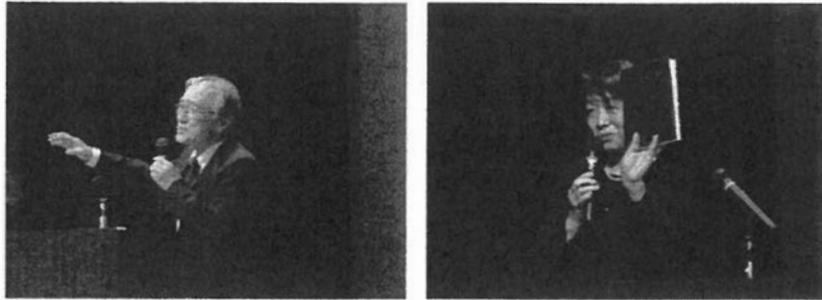
別途積立金

別途積立金	2,462,976
-------	-----------

定時総会における講演会 5月21日(月)

講師：(財)新渡戸基金理事長 藤井 茂 氏

演題：「田中館愛橘と新渡戸稲造」



今回 講演会の進行役をつとめて頂いた菅しのぶさんと藤井講師は旧知の間柄でした

講演要旨

明治維新の世の中が混沌とした時代に、南部藩から明治4年に稲造、原敬、佐藤昌介、明治5年に田中館、そして同郷岩手から後藤新平、斉藤実らがほぼ時を同じくして上京し、維新以降の新しい国造りに大きな貢献をすることとなる。稲造、愛橘は明治8、9年の東京英語学校時代から、ズーズー弁でお互い語り合う志高き仲間であった。

佐藤昌介が札幌農学校へ転じるときに愛橘は反対しているが、佐藤は家庭の事情もあり経済的に困窮していたので報酬が魅力的であった。

愛橘は熱心なローマ字論者ですが、明治40年1月21日、ローマ字ひろめ会で新渡戸が講演している。明治42年12月、東大に隣接する第一高等学校グラウンドで学校長新渡戸から試験飛行の快諾をもらい、子供が乗ったグライダーで人間が空を飛ぶ国内初飛行に成功した。

第一次世界大戦後、世界平和を求める機運が大きくなり、大正9年国際連盟が設立され、新渡戸は求められて事務次長に就任した。

2年後の大正11年、新渡戸が中心になり国際連盟知的協力委員会が設立されアインシュタイン、キュリー夫人などが委員となり、現在のユネスコ活動の基を築いた。

また、新渡戸はオーランド島紛争を解決に導くなど世界平和に大きく貢献している。7年に及ぶ国連事務次長を辞任し、昭和元年に帰国しましたが、昭和2年に田中館が国連知的協力委員会委員に任命されている。

昭和2年4月30日、南部同郷会主催の「新渡戸博士歓迎・田中館博士送別春季総会」に招かれて同郷人と歓談している。また、田中館は巖鷲寮（北大へ進んだ岩手県人が入る寮。札幌市内）の名付け親であり後輩たちの生活環境にも気配りをしている。

昭和8年5月25日午後5時から南部同郷会主催の新渡戸稲造博士歓迎会（米国から帰国）に招かれ、南部利英伯爵や田中館、山屋他人らと歓談する。

昭和8年、田中館が知的協力委員会委員の任期が満ちたとき、後任に新渡戸が決定していたが新渡戸はカナダのビクトリアで急逝した。

同年、日本は国際連盟を脱退することとなる。

昭和8年10月、新渡戸が亡くなったのち、新渡戸の遺影に田中館が寄添った写真があり、昭和8年11月18日、田中館の回想「新渡戸君の追想が岩手日報に掲載されています。また、昭和11年『新渡戸博士追憶集』を出版するときに田中館が寄付金5円を出しており、これらのことから同郷人として、学者として、国際人として二人のつながりの深さを知ることができる。

総会挨拶 要旨

会長 工藤 武三

田中館愛橘と相馬大作

◆江戸後期、欧米列強によるアジア侵略・植民地支配の大きな潮流の中で、いかに日本を守るのか、幕府に厳しい選択が求められていました。

この国難の時期に郷里に戻った大作が、私塾「兵聖閣」を開講し、北方防備の重要性と有事のときには命を賭して国に尽くす覚悟を説いている。

その後相馬大作事件により千住小塚原で獄門の刑に処せられる事となるが、その生き様は吉田松陰・水戸学の藤田東湖も一目おいた存在であったということです。

この実用流は、大作亡き後もこの地で脈々と受け継がれ、明治維新におけるこの地の質実剛健の気風に繋がっております。

愛橘の祖父も実用流の師範代であり、その精神は父から愛橘へと受け継がれております。

また、会輔社に代表されるこの地に深く根ざした独特の文化風土は、新しい夜明けを予言させるものであり、呑香稻荷神社は正にこの地を照らし続けてきました。

この二つの大きな力を父方と母方からいただき、愛橘は生まれるべくして生まれたのだと思われます。

◆過日、達増拓也知事の書簡に、「明治維新は岩手で始まり、岩手県人が完成させた」という記事がありました。

明治維新に向けて、日本全体のために行動する「志士」の時代への先鞭をつけたのは、郷里二戸で私塾「兵聖閣」を開塾し、二百数十名の塾生に北方防備と日本の夜明けを説いた相馬大作であり、1818年の開塾から今年ちょうど200年目に当たり、この時を明治維新の起点として見るのではないかとこのものです。

そしてかたや大正デモクラシーの花開かせた日本初の平民宰相原敬の誕生が日本近代化への一つの到達点であるというものです。

くしくも原敬と愛橘は同年であり、南部藩校修分所で机を並べた同期でもあります。

ふたりとも大志を抱き上京後もお互い切磋琢磨しあいながら日本国のリーダーとして活躍し、原敬が暴徒による悲惨な事件で命を落とすまで、親しく交流が続いております。

私塾「兵聖閣」200年 明治150年 大正デモクラシー100年、この節目の時を迎え、地域の偉大なる先人、大作と愛橘が一つになることで地域の魅力が倍增するのではないのでしょうか。今後共、愛橘会の活動にご理解とご支援をお願い申し上げます。



いつも愛橘博士の和歌で献歌をしていただく金田一歌のつどいグループの皆さん

総会において新役員が選任されました

会 長	工藤 武三			
副 会 長	小保内 道彦	久慈 浩	菅原 孝平	小松 務
理 事	大西 武夫	國分 巖士郎	山本 茂	田中 利見
	佐々木 裕子	生内 雄二	小野寺 則雄	丹野 明法
	黒澤 一史	冨田 喜平司	菅 陽悦	田代 博之
	田中 勝則	内沢 真申	中村 光洋	冬川 昭則
監 事	馬場 正弘	中奥 孝宏		
顧 問	丹野 幸男			
事務局・会計	丹野 國輔			

田中館愛橋会 元会長丹野幸男様のご逝去を悼んで

去る 8 月 12 日 本会創設以来 26 年間の長きにわたり 会長として多大な貢献をされた丹野幸男元会長がご逝去されました。

田中館愛橋会は郷土二戸市が生んだ世界的物理学者田中館愛橋博士の偉大なる業績を後世に伝えることの重要性が認識され、その事績の調査及び顕彰活動を目指し、昭和 61 年 5 月 21 日に設立され、初代会長に丹野幸男様が就任されました。

以来、会員及び関係の皆様のご理解のもと、丹野会長の強い使命感に支えられ多くの顕彰活動に取り組んでまいりました。

田中館博士関連の出版物や復刻本の発行、博士ゆかりの文化人による講演会、平成 11 年には長年に亘る建設運動が実り、悲願の「田中館愛橋記念科学館」建設の原動力となりました。

これらの事績を振り返り、丹野会長の存在感の大きさに、崇敬の念深まるばかりです。

また、平成 28 年には歴代会長の思いを受けて念願の博士の銅像が科学館前に建立され、おかげさまで市民に博士を身近な存在として印象づけるとともに本会の存在も高めることとなりました。

幕末から明治・大正・昭和と、この地に脈々と受け継がれてきた独特の気風と風土の中で、多くの先人先輩を輩出してきた郷土の誇りを次世代に伝えていくことの重要性を考えると、今後の愛橋会の活動について何かとご相談ご指導いただかなければならないこのときに、小保内岩吉前会長につづき、丹野幸男元会長という大きな存在を失うことは極めて残念なことでありますが、どうか天国から愛橋会の活動をお見守り下さい。

丹野幸男元会長のご冥福を心からお祈り申し上げます。



慶應義塾大学日吉紀要
ドイツ語学・文学
第 55 号 抜刷
平成 30 年 3 月

より抜粋しました

187

退職記念に寄せて

田中館愛橘のローマ字がつなげた ドイツ人・クナウプ教授と岩手県^{にのへ}二戸 二戸でのクナウプ教授

菅原孝平

クナウプさん

のっけからで失礼とは思いますが、慶應義塾大学経済学部のクナウプ教授は、わたしたちにとってはクナウプ教授でもクナウプ先生でもなく、なぜか“クナウプさん”である。

田中館愛橘 TANAKADATE AIKITU とローマ字

クナウプさんの日本でのローマ字研究で、避けては通れない人物がいた。その人物とは当地（岩手県二戸市）出身の物理学者・田中館愛橘 TANAKADATE AIKITU である。

田中館愛橘といっても現在では“はてなマーク？”に思う方だけかもしれないが、東大一期生から東大教授となり「日本物理学の父」と呼ばれ、「海外において本格的な物理学を学んできた最初の日本人」（『日本の科学技術 100 年史』）と評される明治・大正・昭和の物理学者である。

その活躍は広範囲にわたり物理学の範ちゅうを超えている。航空便のなかった時代に 22 回の海外出張、68 回の国際会議出席という経歴をもつ。

愛橘は地球物理学と航空学への貢献で 1944（昭和 19）年に第四回文化勲章を受章したが、第一回文化勲章の長岡半太郎・本多光太郎・木村栄や

188

「天災は忘れた頃にやってくる」で知られる寺田寅彦らの物理学者はみな弟子である。

東大名誉教授となり日本学士院会員・貴族院議員などを歴任し 1952 (昭和 27) 年、95 歳の天寿を全うしたが、当時の男性平均寿命は 60 歳だった。葬儀会場は東京大学安田講堂であった。

愛橘は、1872 (明治 5) 年 9 月に慶應義塾に入学しているが、月謝 3 円は高額で負担が大きく在学 1 年 3 カ月でやむなく退学した。しかし慶應義塾大学関連の情報では、慶應ゆかりの人物としてあげられているようだ。

さて先に幅広い活動分野と述べたが、その一つに 1885 (明治 18) 年からのローマ字の考案・普及がある。日本式ローマ字とか田中館式ローマ字と呼ばれ、その普及に生涯をかけた。ヘボン式と異なり日本語にマッチしたもので、小学校教科書の訓令式ローマ字の土台となった。だから愛橘は出身地の二戸などでは「ローマ字博士」で親しまれ、膨大なローマ字日記が残されている。

クナウプさんと二戸の出会い

数年前のある日のこと、二戸市にある田中館愛橘を顕彰する記念科学館に、外国人が訪れた。慶應義塾大学経済学部教授ハンス・ヨアヒム・クナウプ先生であった。田中館愛橘のローマ字について研究されているという。偶然にもそこに居合わせたのが田中館愛橘会事務局長の中村誠さんだった。

中村さんは、1986 年に設立した顕彰団体・田中館愛橘会の第 2 代事務局長として博士の事績研究・発信など顕彰活動推進の中心人物だから、クナウプさんにとってこれ以上の幸運な出会いはなかったといえる。

ローマ字がお二人を引き逢わせたわけで、逢われるべくして逢った“最高の出逢い”である。愛橘は地磁気研究のパイオニアであったから、その地磁気という赤い糸が結びつけたのかもしれない。

クナウプ教授と岩手県二戸 189

中村誠さん

中村誠さんは実に穏やかな風貌をもち、かつ温厚な人柄なので誰からも愛されていた。愛されていたと過去形にしたのは残念ながら昨年 2017 年 8 月 5 日、急逝されたのである。享年 65 歳、心筋梗塞だった。「明日会いましょう」と前日には電話で元気に語り合ったその翌朝のことである。早すぎた。惜しんでも惜しみ足りない大切な友人との、あまりにも突然のお別れだった。

クナウプさんは多忙な学究生活の中、わざわざ岩手・二戸まで墓参りにおいでくださった。

「見返りを求めない〈滅私〉の原点は、生まれ育ったふるさとへの想いであり、ふるさとの未来のために自分が何をできるのかを自問自答される中で、博士との出会いがあったのではないか」と愛橘会会長は述べている。博士を愛し、その研究や情報発信などでまたとない懸けがいのない人物だった。

中村さんは自他ともに許す“博士にハマッタ、そして多才な男”だった。

地元演劇活動の大きなリーダーとして脚本・作詞作曲・演出などを手掛けてきた。博士没後 50 年記念事業の一環として 2002 年 8 月には二戸市民文化会館でミュージカル「Aikitu・田中館愛橘物語」を上演した。さらに秋の二戸祭りでは山車に『風流 愛橘の大鯨退治』を、またアインシュタインやキュリー夫人など博士ゆかりの人物で仮装行列をプロデュースするなど、中村色を遺憾なく発揮して好評を博した。

物理学者がミュージカルに？ 本当の話である。亡くなる直前にも「今なら、もっと中身の濃いよいミュージカルができる、したい」と熱く思いを語っていたのが強く印象に残る。

また中村さんは、岩手県紙・岩手日報に生誕 150 年の記念記事『肝を練れ——田中館愛橘の事績』（全 10 回）を連載し、青森県紙デーリー東北に『今やらねば——田中館愛橘の生涯』（全 20 回、共著）連載するなど実に精力的な活動を展開してきた。

190

クナウプさんとのお付き合い

こういう中村さんだから、クナウプさんをすぐわたしに引き合わせてくれた。初対面なのに、何故かまったくそんな感じをあたえないクナウプさんだった。大学教授であるが、柔和なお顔でつぎからつぎへと軽妙にしかしアカデミックな話題を展開していくクナウプさんは、わたしには仏文学者ではないかと思わせられたのだった。その気配りはわれわれ日本人以上に日本人らしいお方だ。

言葉の訛りに話が及んだ時のこと、クナウプさん「わたしのドイツ語も東北訛りですよ」と。一瞬“?”。ご出身がドイツ東北部とお聞きしておもわず笑いが――。日本式ローマ字はもとよりいろいろな言語や田中館愛橘の業績などなど未知のことがらが目の前にどんどん広がる、クナウプさんとの会話。まさに「未知との遭遇」の連続である。たぶん人一倍好奇心の強い中村さんやわたしにとり、時間のたつのを完全に忘れていた時間!

こんな幸せな時間を持てた喜び、しかもドイツ語ならぬわかりやすい日本語で。

さらにここに三角(みすみ)義彦さんが加わる。岩手県希少動物植物調査専門調査員の肩書を持つ、根っからの自然愛好家。野鳥研究者でもあるクナウプさんとは、すぐに意気投合。トリで馬が合う仲に。

ありがたいことに、クナウプさんお気に入りの金田一温泉・きたぐに旅館にまで押しかけ、夕食をともにしながらというお付き合いにまでになっていった。話題に事欠かない仲間、地酒・南部美人を飲みながら話は延々と続く……。ところが中村誠さんは、生まれつき正真正銘の下戸。だが、酒の勢いが加わったわれわれよりも熱いのが中村さん。いうなれば“談論風発金田一温泉きたぐに旅館版”だ。

夜の更けるのを忘れて話が続くが、翌朝はシャッキッとしてフィールドへ出発というタフなクナウプさん。野鳥探訪であちこちの高原へ出向き、高原野菜地ではトラクター操縦に挑戦するかと思えば、近くの教会でオルガン演奏に時を忘れる……。

クナウプ教授と岩手県二戸 191

また厳冬のある夜。予定外のことであったが、二戸市内の 400 年以上の歴史を持つ国の選択無形民俗文化財「サイトギ」にお誘いした。小さな神社に伝わる五穀豊穰・無病息災を祈願する伝統神事。即「行きましょーう」。マイナス 7℃の肌を刺す冷気の中、男衆の水ごり、裸参りそしてクライマックスの舞い上がる火の粉の向きから作柄を占う火祭りと一連の神事に感激されたこともあった。

ヨーロッパなどでは、仕事とプライベートをきちんと区別し、休日は自然とのふれあいで心身のバランスをとっているとよく聞くが、まさにその生きた見本が目の前のクナウプさんとお見受けをした次第。

クナウプさんによる講演

この交流を通じて田中館愛橘会では、必然的にクナウプさんのお力を借りることになった。それは恒例の総会での講演であった。例年は命日の 5 月 21 日。大学も新学期が始まったばかりの大切な時期なのに、クナウプさんは快諾してくださった。言語学者クナウプさんによる日本式（田中館式）ローマ字の解説、これは願ってもない場面だ。しかもクナウプさんの母国ドイツは若き田中館愛橘が留学した国。わたしたちにはなかなか分からない留学時代のドイツの歴史、社会背景などを解説していただける。こんなラッキーなことはない。それもこれも田中館愛橘の日本式（田中館式）ローマ字が、呼び寄せたこと。

そして実現した講演は実に 4 回に及ぶ。

2013（平成 25）年 5 月 21 日 「グローバル精神の先駆者としての田中館愛橘先生」

2014（平成 26）年 5 月 21 日 「田中館愛橘先生の時代とヨーロッパの技術革命の背景——鉄道・タイプライター・航空機」

2015（平成 27）年 5 月 21 日 「田中館愛橘先生のベルリン体験——日記と出会い——」

192

2017 (平成 29) 年 5 月 20 日 「第 14 回国際連盟総会における田中館愛橘先生の英語講演——講演のオリジナル原稿に関連して——」

田中館愛橘会 31 年間の歴史で、初めてのことである。

この度、定年退職となられるそうだが、これからもいろいろな機会にお会いして、親しくご教示いただくことを願ってやみません。

「日吉紀要ドイツ語学・文学第 55 号」
(2018 年 3 月) 187 ~ 192 頁 (一部修正)

田中館愛橘会主催

講演会
(講演は日本語です)



演題：
「田中館愛橘先生の時代とヨーロッパの技術革命の背景
— 鉄道・タイプライター・航空機 —」

講師
京都府立大学経済学部教授
ハンス・ヨアヒム
ケナウツ氏



ドイツ・デュッセルドルフ大学
博士(経済学) 博士(言語学) 卒業
京都府立大学外語学部教授として
2009年、京都府立大学退職
現在オーストリア
「やさしいドイツ語」講座 (2012年開始)
ドイツの歴史や文化について
講演や執筆活動も行う。
ドイツ語、英語、日本語

5月21日 水
11時

二戸市シビックセンターホール
二戸市公民館本館2F-2
入場無料
問合せ(二戸市シビックセンター)
田中館愛橘会 0195-25-5411

主催：田中館愛橘会 後援：田中館愛橘記念科学館

平成30年度 第10回ローマ字書道コンクール

今年度のローマ字書道コンクールは下記開催要項にて開催され多くのご応募を頂きました。
金・銀・銅、各賞の作品を掲載致します。

- 趣 旨 二戸市シビックセンターにおいて、科学館の名前にもなっている田中館愛橘博士の提唱した日本式ローマ字を顕彰し普及を図るため、小学生（高学年）・中学生・高校生を対象として「第 10 回ローマ字書道コンクール」を開催します。
- 主 催 田中館愛橘記念科学館（二戸シビックセンター）
- 共 催 二戸市 二戸市教育委員会
- 後 援 田中館愛橘会
- 募集作品 ローマ字による習字
※半紙を用い、各部門とも「毛筆により与えられた課題を手本」にローマ字で書くものとします。
※学校名・学年・氏名を漢字、ひらがなで応募用紙に記入し貼付願います。
※筆ペンの使用は不可とします。
- 部 門 小学校高学年の部、中学校の部、高等学校の部
- 課 題

小学校高学年	中 学 校	高 等 学 校
Sikisima	Hana no Tayori	Totukuni no Hate Made okuru

※敷島の 花のたよりをとつくにの はてまでおくる ローマ字のふみ (全文)

○小学校の部 金賞



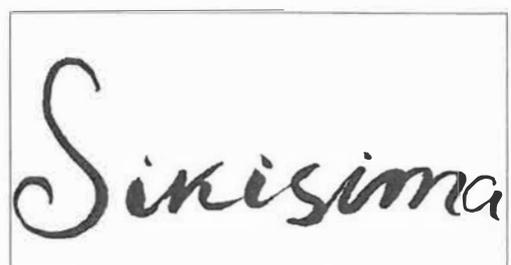
石切所小学校 6年 遠藤 美佑

銀賞



福岡小学校 6年 小笠原 惇留

銅賞



福岡小学校 5年 赤石 煌莉

○中学校の部

金賞



福岡中学校 3年 遠藤 珠羽

銀賞



御返地中学校 1年 多田 優希乃

銅賞



福岡中学校 2年 志田 菜々美

○高等学校の部

金賞



福岡高校 2年 佐藤 さくら

銀賞



福岡高校 2年 奥 塔子

銅賞



一戸高校 2年 姉帯 美空

・田中館愛橘会 会報 第 56 号 ・会報発行/年 1 回発行予定
 ・発行所/田中館愛橘会 会長 工藤 武三、編集者 丹野 國輔
 〒028-6103 二戸市石切所荷渡 6-2 二戸シビックセンター内
 ・印刷所/沢倉印刷株式会社

TEL.0195-25-5411
 FAX.0195-23-3548
 振替口座/ 02350-8-18847